

## 主 客

凡<sup>およそ</sup>の病を治するに先ず病因をたずね、其の後主証と兼証とを分け（る）べし。主客見えねば薬は効かず、其の分けようにて病名のつけようも違ふなり。是其の医者の見立てにて工（巧）拙のわかる処にて、眼のつけどころ第一なり。悪く心得ると主客の差別もなく、うかとして薬を与るものあり。たとえば頭痛もすれば咳も出る痰もはると云う時は、桂枝湯も麻黄湯も又小青竜湯も参蘇飲も芎黄散も敗毒散のようなものは皆用いて適せずといわず、人々の心得て用いた所が何れでも治す。是は元来引風が主証故、発散すれば外邪の氣去りて彼の兼証の咳も頭痛も治するなり。是に悪しく飲み込むと、方は何れにても良き事も思ふは<sup>おおいにひ</sup>大非なり。

其の主証は軽邪なれば薬にてなくとも（なくても）、温<sup>うどん</sup>麵にても生姜酒にても一汗して治す。引風の病人を見合いにして、大病にても何方にてもすむと取りさわぎをするは不案内より起きたるなり。<sup>はじめ</sup>初の邪氣が強ければ、うかうかとしている内に大病になる。主客の証、見えねば一方にては主治不足な様になるは筋を飲み込まぬなり。方は短味を貴ぶ。一味の分量多き故、其の氣強し。多味なれば七に少しばかりをかける故、何ほどの神品にても其の力豈に強からんや。欲心深く加減と云えども、減はせずに加ばかりして本方の薬味よりも加味多くなる有り。全く主客の見えぬ人のする所にて、是を大損と云う。

さて主客のとりように付いて一つの話あり、夏日、奥州白川郡渡瀬村の農民の娘、産をしたりけるが時々寒熱ありて大汗流れる如く、遥かに予を迎う。困って官に乞いて宿を経て行きて治す。豪農なれば医者大勢集まりて、衣被沢山着せて大事にかけて戸障子も閉じて、独参湯と大補湯にて数日を連服すといえども、大汗二、三日に一発し、少しずつの汗は毎日なり。予脈を診するに浮散数、産後血熱の常体なり。飲食乏しく傍人の騒ぎ強き故、当人も必死の氣になりて甚だ衰えたる様なり。医生等曰く、汗多く陽亡きは恐るべきの第一にて、頻りに参耆の効を頼めども、自汗多く衣被も二、三度ずつも着替えるに猶<sup>しゅん</sup>滲（滲）すと云う。予病家へ告げて曰く、「着服多く戸障子も閉じたれば、温熱の時節に余り鬱して悪しし、平日通りに少し心を付けて取り扱ってよし。氣力益々衰えるなれば、よき程にすべし。以来は汗も出まじ」と言い含めたれば、医生等予が高言吐いたりと思ひしや詰り問ふ（詰問した）。予曰く「公等は兼証を治せし故に治することはなし。自汗ばかりが<sup>ふう</sup>風と（ただ急に）発するならば、公等の主方通りてよきことならんが、先ず寒熱が来てから汗を発

するは、汗は兼証にて寒熱が主証なり。寒熱をさえ取れば汗は出ずべきはずなし。是主客の証の取り違えなり。極めて知る、此の婦人は産後壯健をたのみて保護の仕方悪くして此の証を發したらん」と云えば、家人皆曰く「平産故にあまり用心もせざりけるが、一日悪寒戦慄して此の如くになりたり」と語る（原文はカタル）。産後二、三日を経て発熱するは血氣も新たに動きて、未だ落ち着かぬ処へ外より動かす故に、件の如き証を發するもの多し。即ち柴胡桂枝湯を作りて飲ましむ。二宿逗留する中、起色を得て、是より寒熱来たらず。寒熱なき故、発汗もなく全快したり。主客の見分けようにて病人を不治の郷へ案内して引き込むようになることあり。

又産後二、三日を過ぎて、血暈を發するものは必ず乳汁出<sup>で</sup>ず、其の熱も解しかねること、当座に發暈するよりも悪しきものなり。